

遺体を整え、旅立ちの準備をしてひつぎに納める納棺師。青森市に女性納棺師で構成する葬儀社がある。女性ならではの心遣いで遺族の心を癒やし、落ち着いた時間の中で、家族のつながりの大切さを訴える。

(菊谷賢)

遺族の心を癒やす

青森・女性納棺師

「疲れたでしょう」
「さあ、顔を洗ってしま
しょう」。

青森市南側の葬儀社
「こころ」の遺体安置
室。アロマの甘い香り
が流れる和室で、女性
納棺師が、体温が残る
死者の手をときほぐし
ながら語り掛ける。
髪を洗って、口紅を
ほどこし、つめを切る。
ゆっくりと静かな時間
が流れる。

故人の生きた証し

葬儀社「こころ」は、
首都圏で納棺の経験を

細やかな心遣い お別れの場提供

積んだ青森市出身の女
性50が昨年11月、立
ち上げた。遺族が、ゆ
っくりと泣くことがで
きるお別れの場を提供
したいと思ったから
だ。

自らの手で母送る

20代から50代までの
納棺師8人は全て女
性。「女性ならではの
心遣いができます。『母
の手』として、故人を
お送りしたい」と女性
社長。「遺体を拭き清
める時には、家族にも
参加してもらっていま
す。ご遺体を見れば、
その人の人生が分か
ります。故人が生きた証
しを確かめ、人生を振

納棺師という職業
は、1954年の青函
連絡船洞爺丸の転覆事
故がきっかけで始ま
ったとされる。1400
人以上の犠牲者に対応
するために、葬儀社だ
けでは人手が足りず、
地元住民が遺族への引
き渡しを手伝った。以
降、職業として確立さ
れた。

「こころ」の納棺師

は、納棺だ
けではな
く、通夜・
葬儀まで担
当する。
遺体の状
態は、時代
を映し出
す。医療の
進展とも
に気管切開
している人
が増えた。
喉の傷を隠
すため、納
棺師は、ネ
ックフラワ
ー（花輪）

をあてがう。
がんを患い、モルヒ
ネによって顔が黒ずん
だ遺体には、ファンデ
ーシヨンで顔色をよく
する。抗がん剤の影響
で、髪の毛が抜けた人
には、かつらや帽子を
添える。
孤独死して皮膚が崩
れた遺体でも、化粧を
施して可能な限り修復
する。
遺族の中には「どう
せ焼いてしまつのに、
なぜ化粧をする必要が
あるのか」と言い放つ
人もいる。一方で深い
愛情を注ぐ人がいる。
「おばあちゃんに、ウ
エディングドレスを着
せてあげたい」と求め
る遺族もいる。
「こころ」の副社長
・工藤暁子さん(47)
は、がんを患っていた
母・ヨシエさんを「自
分の手で送りたい」と
納棺師となった。今年
2月、ヨシエさんが亡
くなった時には、自分
の手で実母を納棺。心
残りはないという。
別の納棺師・小関寿
弥子さん(33)は遺族と
悲しみを共有できた
時、家族の大切さを感じ
るという。
「家族のつながりが
希薄になった現代だか
らこそ、納棺の儀を通
して、家族の絆を確か
めてもらいたい」
生と死を見つめる女
性納棺師たちは、口を
そろえてこう語る。



モデルを使って納棺の儀を再現する工藤さん(左)と小関さん